

惠慶百首について——好忠百首・順百首との関連——

松 本 真奈美

惠慶法師の百首歌「惠慶百首」については、夙に藤岡忠美氏⁽¹⁾、山口博氏⁽²⁾に論及があり、金子英世氏⁽³⁾によって他の初期定数歌作品との表現的関連が説かれるなど、平安中期に展開した初期定数歌という作品群の一翼を担うものとしての性格が徐々に明らかになりつつある。一方、惠慶百首の作品世界そのものを読み解く試みは、南里一郎氏⁽⁴⁾の諸氏⁽⁵⁾によりようやく端緒が開かれた段階と言えよう。

本稿は、惠慶作品研究の一環として、惠慶百首が好忠百首、順百首といった作品といかなる関わりを有しているか、惠慶百首の特質・独自性はいかなる点に認められるか、それは惠慶の作品全体の傾向といかに関わるのか、などについて考察することを目的とする。

初期定数歌群を一連の和歌的事象として捉え、その表現世界の全容を解明する視点も極めて有益なものである。しかし本稿では、まずは独立した一作品としての惠慶百首の特質をとらえることを主眼としたい。惠慶作品の研究そのものがさほど進んでいるとは言えない現況では、本稿の如きアプローチもあながち無意味なものではないであろう。こうした作業の蓄積が初期定数歌研究の一階梯ともなることを望むものである。

惠慶百首は『惠慶集』の末尾近くに存する。底本の書陵部蔵一五〇—五五八本では「ひとひめぐり」題の物名歌一首を欠くが、これは越桐喜代子氏蔵本で補うことができる。成立年次については、天徳末年（九六一）頃成立の好忠百首より後、という程度のことしかわからない。構成は好忠百首にほぼ同じく、長文の序、および春・夏・秋・冬・恋歌群各十首、「安積山」「難波津」の歌をそれぞれ歌頭と歌末に置いた杳冠歌三十一首、十干および方位などの名称を詠み込んだ物名歌二十首、計百一首より成る。

序の内容はおよそ以下の通りである。

天徳の末頃、好忠という人が四季の情趣に感じて詠んだ百首の歌が世の中に流布し、物の興趣を解さない人も感動を覚えた。世の中の存在は、貴賤の差や風流への好尚の如何を問わずいずれば減じる、ということについて、その後聖叔という人が同じように百首の歌を詠み、身分の低い人々にまで感銘を与えた。出家の身の自分もさすがに物の情趣を忘れたので、世の中のはかなさも詠歌に寄せて表現したかったので、昔の喜撰法師、交野の沙弥などの僧侶が世を捨てながら歌を詠んだ宮為の真似事

になつてしまつた。見る人はきつと笑うだらうよ。

好忠の製作した百首歌とその流布、追隨者の出現に刺激を受けて自身も百首歌を詠みなしたこと、そして謙辞を付しながらも、自身の百首歌製作を昔の歌僧の振る舞いの後追いであると位置づけ、一種の正当化を行おうとしていることがまずは読みとれるであらう。序の後半に見られる表現「あはれよの中は、さ、がにのいやしきたうときも、はるのたのすくもすかぬも、いひせめては、おなじみやまのくもかすみとのほりぬるをやといへる事どもを」は、好忠百首・序の末尾近くの表現「くにもなぐつるも（あ）」は、好忠百首はふむしも心のゆくゑはへだてなしとおもひなせば、なにはなるあしきもよきもおなじ事、すくもすかぬもことならず」を踏まえながら、好忠百首の趣旨を記したものである。

このように、好忠の百首歌という新形式の和歌連作に大きな刺激を受けて製作された恵慶百首であるが、百首中の和歌の表現にも、好忠百首中の歌からの影響を指摘することができる。その例を、影響を与えたと思しき好忠百首詠とともに示せば以下の通りである。

①やまざとのしばのいほりもふゆくればしらすたまふける心ちかもする

(恵慶集・百首・冬・二二八)

ふけるとてひとにもみせむきえざらばあばらのやどにふれる
しらすたま

(好忠集・好忠百首・冬・四〇六)

②こひしきにこゝろのかぎりくだけなはいづれとよりてのちもあ
ひみん

(恵慶集・百首・恋・二三七)

きみこふるこゝろはちゞにくだくるをなにかずならぬわが身
なるらん

(好忠集・好忠百首・恋・四一六)

(参考)

ひとたびもわりなくものをおもふにはむねもちゞにぞくたく
べらなる

(好忠集・順百首・沓冠歌・恋・五五四)

③おほしまやをちのしほあひを行舟のかちとりあへぬこひもする
哉

(恵慶集・百首・恋・二四三)

ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行ゑもしらぬこひのみち
かな

(好忠集・好忠百首・恋・四一〇)

①に掲出の二首は、閑居に降る霰を「白玉」に見立てて詠じた歌である。「霰」を「白玉」に見立てる例は「かきくらし霰ふりしけ白玉をしける庭とも人のみるべく」(後撰・冬・四六四)にも見られるものであるが、好忠詠のおもしろさは、寶石を連想させる「白玉」を、およそイメージの対照的な、荒れた住まいにとりあわせた点にある。その趣向を恵慶も踏襲し、山里の簡素な庵の「白玉」を詠じたものであらう。閑居を好忠詠の「あばらの宿」よりも具象的に「山里の柴の庵」と表現している点には、山里の隠遁生活により近い立場にあったと思しき出家者としての指向が見出せようか。

②の好忠詠は《千々に砕ける心》と《数ならぬわが身》との対比

の妙を狙いつつ、数に数えられる状態に「砕け」るはずもない恋心をあえて数に關することはを用いて詠じた点に新味がある歌であり、参考として掲出した順百首詠や和泉式部百首の著名歌「君こふる心はちちにくだくれどひとつもうせぬ物にぞ有りける」（和泉式部集・百首・恋・九一）に顕著な影響を及ぼした一首である。物理的に砕けたり集まったりするはずもない恋心のさまを「砕く」と「一所に集まる意の」よる」との対比を用いつつ詠じた惠慶詠も、好忠詠の影響下に詠まれたと考えてよいだろう。

③の惠慶詠は「白浪のよするいそまをこぐ舟のかちとりあへぬ恋もするかな」（後撰・恋二・六七〇・黒主）に依拠するが、好忠「ゆらの門を」詠の影響も明らかに看取されよう。惠慶詠の「おほしま」は、周防国「大島の鳴門」の大島と思われる。惠慶百首との先後関係は不明ながら、惠慶は周防の「大島の鳴門」を訪れたことがある。一方好忠詠の「ゆらの門」の所在については丹後国、紀伊国両説がある。『万葉集』の「ゆらの御崎」（巻七・一二二〇）との関わりを重視すれば紀伊国説が優勢と見られようが、惠慶が好忠詠の影響の下に自身のよく知る「大島」の地名を用い、海をゆく舟に寄せる恋を主題とする歌を詠んだとすれば、少なくとも惠慶は、好忠詠の「ゆらの門」を詠者周知の丹後国の地と認識していたのではないかと想像してみたくなる。

その他、「涙の河」に沈む如き恋を詠じた「ひるまなくなみだの河にしづむかなこゝろかろしとおもひしるく」（惠慶集・百首・杳冠歌・恋・二六七）も、好忠百首の杳冠歌の同じ位置（第二十二首）にある「ひとこふるなみだのうみにしづみつ、水のあはとぞお

もひきえぬる」（好忠集・百首・杳冠歌・四四一）からの影響が看取される一首である。

二

しかしながら、他の歌人の百首歌との共通性という観点からすれば、惠慶百首は好忠百首よりもはるかに順百首に近似している。

順百首については、好忠の偽作とする説も古来あったが、好忠百首に共鳴しそれを賛美する表現を有する序の内容、杳冠歌の内部の構成が、やはり手習いことばを歌頭・歌末に置いて詠じた順の連作「あめつちの歌」（順集四〇五二）の構成方法と類似していること、歌の表現から漢詩文的な発想と表現に精通した人物が作者と推定されること、などの点から、近年では順の作と考える説が優勢である。また冷泉家時雨亭文庫より、この順百首の歌二首を記した順集の断簡一葉が発見されたこと¹⁾から、順作説はまず確実になったと見てよいだろう。

さて惠慶百首と順百首との共通性についてであるが、まず構成面而言えば、長文の序、春・夏・秋・冬・恋歌群（概ね各十首）、杳冠歌（三十一首）、物名歌（二十首）という好忠百首の大きな枠組みを、両百首とも踏襲している。ただし順百首は、好忠百首とは異なり、詞書に明示はしないまでも杳冠歌の内部をさらに細分化して、春・夏・秋・冬歌各五首、恋十一首で構成している。これは先に触れた通り、天曆四年（九五〇）前後の作と推定されている順の「あめつちの歌」の構成、春・夏・秋・冬・恋・思歌群（各八首）と類

似する。そして恵慶百首の構成は、杳冠歌の内部に至るまで、順百首と同様である。なお恵慶百首においては、杳冠歌内部の構成が詞書に明示されている。

両百首の先後関係はいかがであろうか。順百首・序の表現を見る限り、順と好忠とは既に親交があり、好忠百首の歌稿は世上の流布を経ずに好忠から順に渡つたらしい。それに対して恵慶百首は、その序によれば好忠百首以降の百首歌の流行を経てから詠ぜられたものであるため、成立時期は順百首よりやや下ると考えるのが自然であろう。先に確認した杳冠歌内部の構成に関しても、恵慶が順に先んじて前述の如き構成を考えたと可能性は、その逆と比べて低いと思われる。したがって以下、恵慶百首は順百首より後の成立ということを中心として考察を進めることとする。

まず両百首には、用語面での共通性が見受けられる。たとえば初期定数歌や河原院周辺歌人の詠で流行した「朝氷」という語が両百首（恵慶百首二二七、順百首五一三）に共通して見られるなどである。しかしそのような用語面での共通性もさることながら、一首の主題のレベルで高い共通性を示す歌もまた、両百首には散見する。調査の限りでは、恵慶百首と好忠百首との間でそのような例（前節で掲げた諸例および本節で掲げる④⑦が該当する）よりも多くの例を、恵慶百首と順百首との間で見出すことができる。

そこでここでは、一首の主題、すなわちその歌が全体としていかなる事柄を表現しているかが共通する両百首の歌を、先行研究による言及があるものも含め列挙し、適宜区切りながら考察を加える。なお歌番号の後に（第四首）などと記してあるのは、百首中の「春

「杳冠歌・秋」などの歌群においてその歌が何首目に位置しているかを示したものである。

①あづまぢにはるやきぬらんあふみなるをかだのはらにわかな
むれつむつち

（恵慶集・百首・春・一九九（第四首））

あづまぢのゆきかふみちのはるた、ばはなみてこ、ろやらざ
らめやは

（好忠集・順百首・春・四八六（第三首））

②我ひくやうひねはなくとほと、ぎすみどりこやまにいりてこそ
きけ

（恵慶集・百首・夏・二〇七（第二首））

ほと、ぎすういだつやまをさとしらばこのまはゆきてきくべ
きものぞ

（好忠集・順百首・夏・四九五（第二首））

①は「東路」の立春をとりたてて詠じた二首である。ただしこれについては金子英世氏に指摘がある通り、東方の立春を歌う趣向は『古今和歌六帖』の歌や漢詩文に類例があるため、同時代に共通する発想に基づく詠みぶりを示している二首と解するべきかもしれない。

②は山に入って郭公の初声を聞くという境地（もしくは希望）を歌った二首。郭公の初声を心待ちにする思い、また山中では普段は聞けないような郭公の声が聞けるという境地を歌った歌は同時代までに多数あるものの、わざわざ山に入ってまで初声を聞きに行く（行きたい）と詠じた歌は古今集・後撰集および古今和歌六帖・第

六の「郭公」歌群には見られない。惠慶詠の、嬰兒を連想させる「みどりこ山」という同時代までに類例のない地名の設定にも、順百首詠の「ういだつ山」との関連が想定される。

③をぐら山しかのかよひちみえぬまでいまはしたくさしげりあひぬらん

(惠慶集・百首・夏・二一一〈第六首〉)

みどりなるいろこそまされよと、もになをした草のしげきなつ、

(好忠集・順百首・沓冠歌・夏・五四二〈第五首〉)

④したひもはうちとけながらてをひて、さかるし、水むすぶけふ哉

(惠慶集・百首・夏・二一五〈第十首〉)

いはしみづ手にむすびつ、わがきゐるこのしたかげもかれにけるかな

(好忠集・順百首・夏・五〇〇〈第七首〉)

(参考)

なつかしくふきくるかぜにはかられてうはひもさ、でくらすころかな

(好忠集・好忠百首・夏・三八九)

人の家の泉のつらにすずむ

山の井をかつ結びつつ夏衣ひもうちとけてすずむ比かな

(順集・女五男八親王屏風歌・二一〇七)

③の惠慶詠は鹿の通り路が見えなくなるまで小倉山の「下草」は繁茂しているであろうと詠じた歌。「下草」は誰からも顧みられな

い身や恋心といった人事的観念を連想させる例の多いことばであるが、やはり「下草」の繁茂を詠じた夏歌が順百首にある。ただしこれは、『天徳四年内裏歌合』の季題として「夏草」題がとりあげられた頃からの同時代の好尚をこの二首が反映していると見るべきかもしれない。なお惠慶詠は「あやしくもしかのたちのみえぬかなをぐらの山にわれやきぬらん」(彰考館本兼盛集・九条右大臣家屏風歌／拾遺・夏・一二八)、「さをしかのかよふもみえぬなつくさもかれにたりとはおもはざらん」(重之集・百首・夏・二五七)との関連も推測されよう。

④の惠慶詠は清水を手に掬ぶ納涼を歌った歌で、川村晃生氏⁽¹²⁾、金子英世氏⁽¹³⁾にも言及がある通り、順百首にも同趣の夏歌がある。なお惠慶詠の初二句は参考として掲げた好忠詠の「うはひもさ、で」との関連が予想され、「さかるし、水」は「せが井の清水」(神楽歌・杓)の誤写もしくは訛伝であろう。また、順の屏風歌に、主題と表

現が惠慶詠と近似した歌が見られることも注目される。

⑤ひとりねのよごろもけさははださむしさほのかはぎりたちやしぬらん

(惠慶集・惠慶百首・秋・二一七〈第二首〉)

あきりのたちつるすがら心あてにいろなきかぜぞきころもにしむ

(好忠集・順百首・秋・五〇四〈第一首〉)

⑥わがいもとおもはましかばさほひめのそむるにしきをたちぞおらまし

(惠慶集・惠慶百首・秋・二二五〈第十首〉)

たれをしかゆきてみつらむさほひめのひとはをらせるやまの
さかしき

(好忠集・順百首・秋・五〇五〔第二首〕)

⑤の恵慶詠は「千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色
まさりゆく」(古今・賀・三六二)を念頭に置きつつ、衣の寒さを
《霧が立つ》ことと関連づけて詠じたもの。順百首にも《霧が立
つ》ことと衣にしみるような風の寒さをとり合わせて詠じた歌があ
る。秋風と衣とを組み合わせた歌ならば古今集・後撰集にも見られ
るが、《霧が立つ》秋の深まりと衣の寒さとを関連づけて詠じてい
る点で、二首は共通性が高いと言える。

⑥の恵慶詠は紅葉を「佐保姫の染むる錦」に見立てている。順百
首詠は難解であるが、わずかに紅葉した山を「佐保姫の一葉織らせ
る山」と表現していると思われる。すなわち二首は紅葉を佐保姫の
染める(織る)ものと見なし、春歌に詠まれるのが一般的であった
佐保姫を秋の神として詠じている点で共通する。ただし佐保姫を秋
歌で歌った例が同時代までにまったくないわけではない。¹⁴⁾

⑦しもがれやならのひろはをやひらでにさすといそげるかみのみ
やつこ

(恵慶集・百首・冬・二三二〔第七首〕)

神まつるさかきはさすになりにつけりゆふづくよにぞおほぬさ
に見し

(好忠集・順百首・冬・五一七〔第五首〕)

(参考)

かみまつるふゆはなかばになりにつけりあねこがねやにさかき

おりしき

(好忠集・好忠百首・冬・四〇五)

⑧るいしつ、いざあきの、にわがせこがはなみるみちにわれおく
らすな

(恵慶集・百首・杳冠歌・秋・二五七〔第二首〕)

やそしまのみやこどりをば秋の、にはなみてかへるたよりに
ぞとふ

(好忠集・順百首・杳冠歌・秋・五四五〔第三首〕)

⑨ふじのみねけふりたえせぬこひといへどよのつねならぬわれを
とらめや

(恵慶集・百首・杳冠歌・恋・二七二〔第七首〕)

ひの
のどかなる時こそなけれふじの山いつかはたえんもゆるおも

(好忠集・順百首・杳冠歌・恋・五六一〔第九首〕)

⑦の恵慶詠は霜枯れの槲の葉を「八葉盤」^{ヤハチラデ}に作るためにいそしん
でいる神官を詠じたものである。「八葉盤」とは数枚の葉を竹串に
さして編んだ笠形の食器である。順百首詠の「杈首」^{ササ}とは、横木を
架けるため材木の先が二股になっているものをいう。一首は難解だ
が、神に供えるためにさした榊の枝の形状をこのように言い、さら
に夕方の月の仄暗い光の中では大幣に見えた、と歌ったものである
うか。いずれにせよ二首は、神に供える植物を集めて形になすとい
う側面に注目して冬の神祭を詠じている。なお冬の神祭という主題
自体は、参考に掲出した好忠百首にも、また同時代までの屏風歌に
も詠まれている。

⑧は秋の野の花見を歌った二首である。これを主題とする歌は「花見にといでにしものを秋の野の霧に迷ひてけふはくらしつ」（後撰・秋中・二七二・紀貫之）と後撰集にも見られるが、恵慶詠と順百首詠は、恋人とともに花見に行きたい思い、もしくは花見の帰途に都鳥を見る、といった、花見にまつわる営為の種々相を具体的に表現している点で共通する。ともに杳冠歌の中の「秋」歌群の歌である。

⑨は富士の山に寄せる恋を歌った二首である。「富士の山」もしくは「富士の峰」は、噴火の煙が立つことから、燃える恋心を連想させる歌枕として古来詠まれてきたが、その「富士の山」「富士の峰」に寄せ絶えず燃えつづける恋心を歌った歌が、両百首ともに杳冠歌の中の「恋」歌群に登場している。

三

ところで恵慶百首と順百首との間には、主題が共通し、かつ一首を構成する語句やことは続きも類似するという歌が少なからず見られる。ここではそうした例を、先行研究による言及があるものも含め、主題を示しつつ列挙する。

⑩袖の「玉」と恋
こひしさの**日数へぬればそでにいつるなみだのたまぞみかきま**
される

（恵慶集・百首・恋・二三八（第三首））

そでにおつるたまはいくらぞちりすらだつもればやまとなる

といふものを

（好忠集・順百首・恋・五二九（第七首））

*恵慶詠の第五句、古本系統の他本（関西大学蔵岩崎美隆文庫本）では「みかさまされる」¹⁵⁾。

⑪「浦波」に寄せる恋

こひしさの**なぐ程もなくうちへてたごのうらなみたちゐわび**
つ、

（恵慶集・百首・恋・二三九（第四首））

かつまたのいけのうらなみうちへてたちてもゐてもものを
こそおもへ

（好忠集・順百首・恋・五二五（第三首））

（参考）

するがなるたごの浦浪たたぬひはあれども君をこひぬ日はな
し

（古今・恋一・四八九）

⑫結水と水音の消失¹⁶⁾

ゐで河のけふなみのをときこえねばふゆのはじめとこほりすら
しも

（恵慶集・百首・杳冠歌・冬・二六一（第一首））

ゐせきよりもる水のをとのきこえぬは冬きにければこほりす
らしも

（好忠集・順百首・杳冠歌・冬・五四八（第一首））

（参考）

水こそ今はすらしもみよしの山のたきつせこゑもきこえず

⑬ 歳末の詠嘆

(後撰・冬・四七七)

のどかにはまちどをなりしあらたまのとしのおいゆく冬はきに
けり

(恵慶集・百首・杳冠歌・冬・二六二〔第二首〕)

あらたまのとしくれゆけばおいにけりこゝろぼそくもみゆる
くものゐ

(好忠集・順百首・杳冠歌・冬・五五〇〔第三首〕)

(参考)

まちどほに思しあきはふけにけりしるくぞみゆるはぎのした
露

(好忠集・順百首・杳冠歌・秋・五四六)

*その訪れを待ち遠しく思っていた時節が終わりに近づいたという
境地を歌っている点で、恵慶詠は(参考)に掲げた順百首五四六
番歌にも似る。

⑭ 植物の成長の早さ

つちのと

かどたわせきのふかりそむとおもひしをひつちのとくもおいに
ける哉

(恵慶集・百首・物名・二八二〔第六首〕)

ひのと

昨日までふゆこもれりしがまふのにわらびのとくもおいにけ
るかな

(好忠集・順百首・物名・五六七〔第四首〕)

(参考) つちのえ

をやまだのひつちのえしもほにいでねばこゝろひとつにこひ
しとぞおもふ

(好忠集・好忠百首・物名・四五五)

⑮ 霞立つ山の花

たつみ

かすみたつみねやいづれぞたづねみんはなのとをめをまぎらは
す哉

(恵慶集・百首・物名・二八九)

たつみ

かすみたつみむろのやまにさくはなはひとしれずこそちりぬ
べらなれ

(好忠集・順百首・物名・五七七)

また両百首には、主題は異なるが一首を構成する語句が共通もし
くは類似するという歌の例も見られる。

⑯ やまぶきのほふさかりになりぬればるでへいでたつわれはか

つぐ

やどちかくさくらほうゑじこゝろうしさくとはすれどちりぬ
かつぐ

(恵慶集・百首・杳冠歌・春・二四九〔第四首〕)

(好忠集・順百首・杳冠歌・春・五三六〔第四首〕)

⑰ くさまくらむすぶたよりもなき冬はあられふるらんあまのあし
やは

(恵慶集・百首・杳冠歌・冬・二六五)

ねのひすとみしほどもなく草まくらむすぶばかりにのほなり
にけり

(好忠集・順百首・春・四八九)

⑬の惠慶詠は、山吹の花の盛りになったのでとるものもとりあえずその名所「井手」を訪れる思い、順百首詠は、咲く一方で同時に散る桜を間近に見たくない思いを詠じたもので、杳冠歌中の同位置の歌である。和歌ではそれほど多くは用いられない「かつく」の語を歌末に置いた点で共通している。⑭の惠慶詠は、草枯れの冬には、葦の葉で葺いた粗末な海人の住居はあらわになり、霰が降っていることだろうと詠じたもの、いっぽう順百首詠は、子の日に若菜を摘んだばかりであるのに繁茂した野の春草を歌った歌である。両歌は「草枕結ぶ」ほど、という言い回しで草の繁茂を表現している点で共通する。⁽¹⁷⁾

そして両百首の物名歌には、同じ語を詠み込んだ歌同士で詠み込み方が極めて類似している例も散見する。「ふたりねしよごとにかくちぎりてきのどかにわれをうちたのむべく」(惠慶集・百首・物名・きのと・二七八)と「さよふけてなにかこひしきのどかにてとしへばしるしあらざらめやぞ」(好忠集・順百首・物名・きのと・五六五)、「いまはいぬゐのへのまへにおいぬともとし月へてもまちもつけなむ」(惠慶集・百首・物名・いぬゐ・二九三)と「きてはいぬゐてはのどかにもゐるもあへずなをひとづまはかひなかりけり」(好忠集・順百首・物名・いぬゐ・五八一)、⁽¹⁸⁾「しきたへのまくらにねざめせられつ、ゆめにだにみぬころにもある哉」(惠慶集・百首・物名・きた・二九四)と「よのなにかはかぬものはこひ

く／＼てぬるしきたへのまくらなりけり」(好忠集・順百首・物名・きた・五八二)の諸例である。

本節に掲げた例において、両百首の歌の語句の類似の度合いは著しく、それぞれがまったく無関係に成立したとは考えがたい。特に⑪⑫⑬⑭⑮の諸例においては、ことは続きの類似も著しい。⑫⑬⑭⑮の例、そして前の段落に列挙した物名歌の三例に関しては、百首中における位置も同じである。惠慶百首は、ほとんど順百首を座右に置いて詠まれたと言い得るほど、順百首に大きな示唆を受けつつ詠まれた作品なのではないだろうか。なおこのような例が百首の後半、すなわち恋歌、杳冠歌、物名歌に集中して現れることも興味深い。惠慶は必ずしも技巧歌を不得手とする歌人ではないが、百首歌を詠むにあたっては、技巧歌の名手であった順の百首歌を参照せずにはられず、極めて近い詠みぶりの歌が出現する結果となったものかもしれない。

さらに、⑪⑭の例において、惠慶は、順百首歌のことば続きに依拠しつつ、なお別の歌——⑪においては古今歌、⑭においては好忠百首歌——に表現の根拠を求めていると目される。ことば続きは順百首歌に寄り添いつつ、歌枕や素材は独自性のあるものを選び直すといった詠み方も不可能ではないであろうが、そうした詠み方はしていない。良く言えば先例に忠実、逆に言えば独自性の看取されない、惠慶の順百首歌受容の一面がここにはうかがえるように思われる。これは第一節で確認した好忠百首「ゆらの門を」詠の受容とはやや異なるあり方と言えようか。

ここまで述べてきた限りにおいて、惠慶百首における順百首から

の影響は、好忠百首からのそれよりも、主題、語句および一首のこの続きの面ではるかに緊密なものと指摘できるであろう。恵慶百首はその序において、好忠百首には言及するが順百首には触れていない。しかし実際の詠歌にあたっては、特に百首の後半部分においては、むしろ順百首の内容、表現に寄り添うように詠歌しているのである。初期定数歌が、先行する初期定数歌作品の構成や素材、表現を受容しつつ独自の表現を生みだしてゆく様相については、夙に論究がなされて久しい。⁽¹⁹⁾比較は難しいが、百一首中十七例以上に渡り主題、語句もしくはことばの面での影響が看取されるのは、初期定数歌間の相互の関係としてもかなり緊密なものと言えよう。順百首からのこのような緊密な影響は、何を物語るのだろうか。

まず考えられるのは、歌人としての順への畏敬の念である。恵慶と順との直接の交友関係は確認されないが、順が「奉同源澄才子河原院賦」(本朝文粹・巻二)でその栄枯を詠じた河原院に恵慶は足繁く出入している。また両者はともに安法、大中臣能宣、平兼盛らに親しみ、ともに藤原忠朝臣屏風歌、天元二年(九九九)内裏屏風歌を詠進している。ともあれ梨壺の五人の一人であり、和漢の学に通じ、天徳四年(九六〇)内裏歌合など晴れの場で活躍した専門歌人であり、かつ遊戯技巧歌の名手でもあった順である。同時代を生きた歌人として、恵慶はその力量の程を十二分に評価していたであろう。紀貫之の家集をその息時文から借り受けて学ぼうとしたように、当代の第一人者たる順の百首歌こそ、自身が同様の連作を詠みなす際の手本にふさわしいと判断したのではなからうか。

ただし恵慶と順の詠歌上の影響関係は、必ずしも常に順から恵慶

へ、という一方的なものではなかったように思われる。

ふねにのりて、やまのもみぢみころ

あきやまにたてたましかばなぎさこぐふなきもいまはもみぢし
なまし

(恵慶集・九八／拾遺・雑秋・一一二六)

そまびとのならさゞりせば秋やまにのきもいまはもみぢしな
まし

(好忠集・順百首・秋・五〇九)

恵慶詠は、自分が乗っている舟の木材がもし今なお秋の山に立っていたならば、今頃はきつと紅葉していたであろう、と歌った著名歌である。一方、加工された木材の由来を思い、あり得たかもしれぬ美しい現況に思いを馳せるといふ同様の趣向の歌が、順百首にある。これは、囑目の詠における恵慶の発見を、順が百首歌の中でややスケールを小さくして踏襲したと見たいが、いかがであろうか。後考に俟ちたい。

四

恵慶百首は、順百首に対する依拠の度合いの強い作品であること否めない。このことは、恵慶が家集に計六種の屏風歌・障子絵歌、拾遺集入集歌として紙絵歌・屏風歌各一種を残しながらも、特に家集所載の屏風歌・障子絵歌に関しては、先行歌を忠実に踏まえた歌が少なからず見られることと関わるかもしれない。そして一方では、たとえば

やまとへくだるみちに、あでといふところに、やまぶき
のはなのいとおもしろきに

やまぶきのはなのさかりにゐでにきてこのさと人となりぬべき
哉

(惠慶集・三六／拾遺集・春・六九)

のような、あるいは前掲「秋山に」詠のような、嘯目の詠に秀歌が多いことを考え合わせると、惠慶という歌人の性格の一面がおぼろげながら把握される。すなわち、自身をその時取り巻く状況とはあまり関わりなく設定された時空の中で、虚構の世界を表現する才能には、好忠や順ほどには恵まれなかったと、ひとまず言えるだろうか。

しかしながら惠慶百首に、好忠百首や順百首には見られない特質、あるいはそれらを凌ぐ達成がまったく看取されないわけではない。藤岡忠美氏⁽²⁰⁾が指摘されたように、好忠百首や順百首とは異なり、序や歌の内容に不遇の嘆きや述懐性が見られないこともその一つである。また惠慶百首には山里を舞台とした歌が比較的多く見られる。いま「山里」「深山辺」の語を指標とした場合、好忠百首にはそれらの語が詠まれた歌が三首(三七二、三九二、三九四)、順百首には皆無であるのに対し、惠慶百首には五首(一九七、二二四、二二八、二五五、二六三)見られ、その中には「みやまべのしかのたちどをたづぬればみせたるものはなつをちのつ」(杳冠歌・夏・二五五)の如く、夏歌の素材としては珍しい、鹿の「夏落ちの角」を詠んだ歌も存する。山里⁽²¹⁾という空間を、より和歌の舞台として浮かび上げらせようとする姿勢には、出家者としての意識がにじみ出て

いると言えるかもしれない。

また惠慶百首には、すぐれた文学性を有する歌も確かに見られる。

よどのなるみづのみまきにはなちかふこまいばへたりはるめき
ぬらし

(惠慶集・百首・春・二〇二)

わが、^やどのそともたてるならの葉のしげみにすゝむ夏はきに
けり

(惠慶集・百首・夏・二〇八)

春夏の歌から一首ずつ掲げた。まず前者についてであるが、「美豆の御牧」もしくは「淀」に放し飼いにされた駒を歌った歌は同時代に散見し、好忠百首にも「のがひせしこまのはるよりあさりしにつきずもあるかなよどのまこもの」(好忠集・百首・杳冠歌・四四八)の一首がある。しかしながら駒の嘶きを明確に表現し、そこに春の到来を感じ取ったこの惠慶詠のような歌は同時代までに類例が見られない。ここで想起されるのは『後拾遺集』の「あはづののすぐろのすすきつのぐめばふゆたちなづむこまぞいばゆる」(春上・四五・静円)である。静円詠は、厭われるもの、気性が荒く意のままにならぬ存在を連想させるものであった「春駒」を、早春の風景の中、生命力に満ちみちた存在としてとらえ返した点で注目される歌であるが、「駒」を春の訪れとともに嘶くものとして歌った惠慶詠も、静円詠に近い境地を示しているのではなからうか。なお駒の嘶きに着目する発想は「辺城之牧馬連嘶 平沙渺々」(和漢朗詠集・水付漁夫・五一〇・晝賦)などの漢詩文の表現に学んだものと

考えられる。

後者は夏の「ならの葉」の茂りとその木蔭の涼しさを具象的、体感的にイメージさせていかにも清新である。夏の納涼詠をあまた展開させた初期定数歌においても多くは水辺の納涼であり、木蔭の納涼詠は実はさほど多くない。その中であつてこの恵慶詠は「なつやまのならのはそよくゆふぐればことしも秋の心地こそすれ」（後拾遺集・夏・二三一・頼綱）に通じるような興趣を示し、『新古今集』（夏・二五〇）に入集するなど後代の評価も高い。木蔭の納涼を主題とした恵慶詠といえは「松影のいはるの水をむすびあげて夏なきとしと思ひけるかな」（拾遺集・夏・一三二）が著名だが、この「松影の」詠が漢詩句を踏まえているように、当該歌の背景にも「緑樹陰前逐晚涼」（千載佳句・納涼・一三九・白居易／和漢朗詠集・納涼・一五九）などの漢詩文の存在が想定されよう。なお和歌素材「ならの葉」については以前論じたことがあるが、当該歌は好忠の「さかきとるうづきになりぬかみやまのならのはがしはもとつはもあらじ」（好忠集・毎月集・四月初・九五）とともに「ならの葉」を夏歌の素材としてとりあげたもつとも初期の作品であり、後拾遺集以降の勅撰集において「ならの葉」が季節詠の素材として定位することに貢献した作品と言える。一方恵慶が活躍していた当時、河原院にはその葉を「ならの葉」と歌われた柏の木が実際に存在していたことを考え合わせると、恵慶が「わが宿のそもにたてるならの葉」と歌った際、彼の念頭には河原院の柏の木があつたのではないか—厳密に言えば恵慶にとつて河原院は「わが宿」ではないが—と推測したくなるのも、以前考察した通りである。すると、

恵慶百首に見られるすぐれた歌の傾向は、河原院という場に関係する歌や漢詩文を下敷きにした歌に秀歌が多く見られるという恵慶作品全般の傾向²⁶と、軌を一にすることになるだろうか。恵慶百首には重之百首、毎月集との共通性が高い歌も散見する。それら他の初期定数歌との関連を分析することで新たにみえてくる問題も多いであろう。今後の課題としたい。

〔注〕

恵慶集は書陵部蔵一五〇—五五八本、好忠集は天理図書館蔵本を底本とし、私に清濁を定め、『私家集大成』番号を付した。好忠集については必要に応じて宮内庁書陵部蔵五〇三—二六本（伝冷泉為相筆本）の本文を（為）として右傍に示した。その他の歌集については特に断らない限り『新編国歌大観』の本文、歌番号を使用した。ただし清濁は私意による。

- (1) 『平安和歌史論』（昭和四十一年・桜楓社）、「曾禰好忠の特異性について」（平成十五年・風間書房『平安朝和歌 読解と試論』所収）初出『中古文学』昭和四十三年三月。
- (2) 『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』（昭和四十二年・桜楓社）。
- (3) 『初期百首の季節詠』（『国語と国文学』平成五年八月）、「源順百首」の特質と初期百首の展開」（『三田国文』平成五年十二月）。
- (4) 南里一郎・今井明・黒木香・竹田正幸・田坂憲二・西原一江・福田智子氏「恵慶百首」春部試注（『純真紀要』平成十六年一月）。
- (5) 恵慶集六五番歌に「おほしまのなると、いふところに、しほみちとまりて、しほのひるまつとて／みやこにといそぐかひなくおほしまのなだのかけぢはしほみちにけり」なる一首がある。続く六六番歌も大島近隣での詠と考えられる。
- (6) 金子英世氏「源順百首」の特質と初期百首の展開（前掲（3）論文）に詳しい。
- (7) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集八』（平成十三年・朝日新聞社）所収「源朝臣順集上」に併せて紹介された同集下巻の断簡一葉。解題は田中登氏。

- (8) 山口氏前掲書五〇三頁の推定による。
- (9) これについては西山秀人氏「源順歌の表現―好忠および河原院周辺歌人詠との関連―」(『和歌文学研究』平成四年十一月)に詳しい。
- (10) 金子氏「源順百首」の特質と初期百首の展開」(前掲(3)論文)。
- (11) 小町谷照彦氏校注「拾遺和歌集」(平成二年・岩波書店・新日本古典文学大系)一七八番歌の脚注によれば、天曆十一年(九五七)四月二十二日藤原師輔五十賀屏風歌。
- (12) 川村晃生氏「歌人たちの夏」(平成三年・三弥井書店「撰関期和歌史の研究」所収)初出「芸文研究」平成元年三月)。
- (13) 金子氏「初期百首の季節詠」(前掲(3)論文)。
- (14) 「いくしほもしくればふらじさほひめのふかくそめたるいとこそみれ」(陽成院「親王姫君逢歌合・一」)、「さほひめにとひみてしかなわきてしもはそのもみちうすきころを」(河原院歌合・一九「佐保山紅葉浅」題)など。
- (15) 熊本守雄氏「惠慶集 校本と研究」(昭和五十三年・桜楓社)第三編・校本篇による。
- (16) 金子氏「源順百首」の特質と初期百首の展開」(前掲(3)論文)に指摘あり。
- (17) 草の繁茂を「草結ぶばかり」と表現する同時代の例に「なつくさはしげりにけりなたまほこのみちゆき人もむすぶばかりに」(元真集・九四・天徳四年内裏歌合撰外歌)、「なつくさはむすぶばかりになりけりのがひのこまやあくがれにけん」(重之集・百首・夏・二四二)があり、参考に
なる。
- (18) これについては好忠百首の「やまぶきもまだちらなくにはるもいぬるでのかはづに身をやなさまし」(好忠集・百首・物名・いぬる・四六八)の詠み込み方もやや類似する。
- (19) 平田喜信氏「和泉式部百首の成立」(平成五年・新典社「平安中期和歌考論」所収)初出「大妻国文」昭和四十五年三月)、平田氏「和泉式部と會禰好忠」(同書所収)初出「論集和泉式部」昭和六十三年・笠間書院)は、和泉式部が百首歌を詠じた際に重之百首・重之女百首に多くを学び、特に重之女百首については内容、歌序に至るまで参照した可能性を指摘する。金子氏前掲(3)論文、拙稿「重之百首と毎月集」(『国語と国文学』平成四年十月)も、複数の初期定数歌間の表現的関連に着目した論である。

- る。なお近藤みゆき氏「古今風の継承と革新―初期定数歌論―」(平成十六年、風間書房・古今和歌集研究集成 第三卷「古今和歌集の伝統と評価」所収)は、好忠百首、順百首、重之百首、毎月集の四作品間の共通表現、独自表現を、Z-TEST統計による文字列総比較を用いて網羅的に取り出し、分析している。
- (20) 藤岡氏「會禰好忠の特異性について」(前掲(1)論文)。
- (21) ただし惠慶が「夏落ちの角」を詠んだ背景には「夏野ゆくをしかのつのつかのまもみねはこひしき君にもあるかな」(古今和歌六帖・鹿・人麻呂・九三二/同・夏の野・一四一・人麻呂/万葉・卷四・五〇二・人麻呂)などの歌の存在が想定されよう。なお「なつやまにたつやをしかのつまならでわがなげきとおちざらめやは」(惠慶集・百首・夏・二二三、越桐氏蔵本では三句「つのならて」)も、鹿の角を詠んだと思しき歌である。
- (22) 静円詠については後藤祥子氏「平安和歌の屈折点―後拾遺集の場合―」(昭和四十九年・笠間書院「和歌文学の世界 第二集」所収)に詳しい。
- (23) 引用は大曾根章介・堀内秀晃氏校注「和漢朗詠集」(昭和五十八年・新潮日本古典集成)による。
- (24) 引用は金子彦二郎氏「増補平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇」(昭和五十二年・藝林舎)による。
- (25) 拙稿「和歌素材「ならの葉」をめぐって」(尚綱女学院短期大学研究報告)平成九年二月)。
- (26) 拙稿「惠慶法師の詠歌環境(下)」(尚綱学院大学研究報告)平成十五年十二月)。

〔付記〕本稿は平成十五年十一月二十八日に行われた東京大学中世文学研究会における発表に基づく。席上御教示いただいた渡部泰明氏、吉野朋美氏に厚く御礼申しあげます。

〔キーワード〕 惠慶百首 好忠百首 順百首 初期定数歌